大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（１）
－現代社会における当事者意識の形成－

滝沢利直＊1、菅田圭次＊2

A Study of the Relationship between Students' Self-understanding and their Social Recognition:Forming the Person-concerned Consciousness in the Modern Society

Toshinao TAKIZAWA＊1, Keiji SUGATA＊2

In this paper, students' present conditions from a viewpoint of self-understanding and social recognition is clarified. The situation of diversification and relativization of a sense of values was created in the process of economic development. During this process the modern Japanese society has become rich. Each person has his/her own life and their lives vary. At the same time, a social sense of togetherness is getting weaker. Young people including college students do not have a common target on society, therefore there exist various standards of value among them. Due to the social change, it is found that the students at Tokyo Institute of Polytechnics have felt self-conflict. In order to help them overcome the self-conflict, Tokyo Institute of Polytechnics offers a course "modern society and people" to the students. The target of this course is that students should understand themselves and recognize the state of society. The more they understand human relationship, the more they will form person-concerned consciousness. Namely, if they overcome their self-conflict, they will feel free from it. This research proved that the course gives students opportunity of person-concerned consciousness, but students' drastic change remains unclear.

１　はじめに

今日の学生（青年）を理解する上で社会環境を構成している「デジタル化」の情報の及ぼす功罪を無視することはできない。さらには、「格差社会」と呼ばれる経済的条件の優劣が規定する生活スタイルや心理に与える影響も無視することができない。

これに関して例えば、「視覚・聴覚・嗅覚情報の《デジタル化》が進行するにつれて、直接的感覚は衰退する。そして近接したもの、比較しうるものとのアナログ的類似性は、遠いものの、遠方にあるもののもつデジタル的本当らしさにその優先権を譲り渡す。かくして感覚世界のエコロジーが決定的に汚染されてしまう」とヴィリリオは述べている[1)]。また、物理的に近い人間との関係性より遠方につながっている人間との関係にプライオリティをおくことにより、関係性に肉体感覚が介在しなくなる。この「つながり」を求めるのは、＜どこかのだれか＞と「つながる」ことにより、孤独な個ではないという「希望」や「安心感」への希求であると、速水由紀子は見る[1)]。

だが、この「つながり」は、ネットの特性を活かしたグローバル化の効用・合理性と表裏でもある。つまり、知の拡大と深化に寄与している。そして同時に、ネットの活用スキルを駆使できる人間が経済的優位性を獲得し、一方開発されたコンテンツを利用するだけの人間は、極端な場合「ひきこもり」そして「ニート」として生身の人間や社会との直接的関係づくりの感触を希薄化して社会的劣位に追い込まれることにもなり、希望に関する格差も生じてくる可能性もある。

柳田邦男はこの状況に対して、急激な IT 革命による社会変化が様々な負の遺産を残しているという認識を示している。人間は多様性を失った「言葉」を発している傾向が強くなっているという。豊かな言葉を失っているという。この時代に生まれ育つ子どもたちの感性や情操の発育のためには、極めて苛酷になっているという認識を示す。そして、今取り

＊1　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授　＊2　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教授
2006 年 10 月 3 日 受理

戻さなければならないのは、「生身で『向き合う姿勢』だ」と提案する[2)]。

さらにはまた、村上龍と伊藤穣一は対談において、「オタクの世界は、ある意味では洗練されていたり、趣味的な世界も極めているんだろうけど、覚悟と主体性がないと」と、語っている。「ただ、洗練と趣味化というのは、すごく居心地がいいものだから、オタクの世界で固まっている人たちには、政治に関与して法律をつくるとか、社会にコミットしていこうというベクトルが働かない。かといって、彼らに対して『もっと政治に興味を持て』と言っても動かない。そう言ったところで、彼らには絶対、伝わらない。そうではなくて、何かを変えたり、権力者がびびるようなことをすることは、すごくおもしろいことなんだよ、という言い方をするしかない・・・。同じ趣味の仲間で固まるよりも、他の世界に向かってコミットするほうが、大変だけれどスリリングで絶対におもしろいと、きちんと伝えていかないとダメなじゃないかなあ」[3)]と描いている。

このような青年の実態把握は、筆者らも否定しない。マスコミはいささか扇情的に負の局面を強調するが、上述の把握は冷静な把握であると思われる。

しかし、我々はこうした若者の状況への言及を踏まえながらさらに一歩進めて、実態調査を行い、本学における学生（若者）の「個」における実態を明らかにした。（本紀要掲載の「大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（２）」「大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（３）」参照）そこでの調査の観点は、自己理解と社会認識である。社会（他者）にコミットしていくことは、生きていくという事実の別の言い方ではあるが、そのコミットの仕方は意識的に取り組まないとなかなか掴みにくい。この調査においては、社会論・自我論の原理を踏まえて自己理解と社会認識の実態把握を行った。

本学部において多様な科目が設定されているわけだが、そのうえで筆者達の関わる科目「現代社会と人」では当事者意識形成という教養教育の観点からその在り方を模索している。

２　教養教育と工学教育

現在若者をめぐる多様な変化を指摘する論調が多いなかで、本学学生もそれらの変化と無縁ではない。この状況を踏まえながら、大学生の自己理解と社会認識がどのように成立しているのかという観点から考察を進める。対象である工学部の学生は、工学の修学を目指して高等教育を受けているが、自己理解と社会認識というキーワードでこの工学教育の基盤となり得る教養教育の在り方を考察したものである。

ところでＪ．デューイは、人間の自己理解と社会認識をめぐる地盤について以下のように把握している。すなわち、「あらゆる個人は、社会的環境の中で成長してきたし、また、つねに成長しなければならない。彼の反応が次第に知的になるのは、すなわち意味を獲得するのは、一般に受け入れられている意味や価値という媒質の中で彼が生活し行為するからにほかならない」[4)]、と。人は、社会的な交わりを通して、次第に自分の精神を獲得していくという指摘である。謂わば、自己理解は多様な信念やルールが織り交ぜられた社会的活動を介して形成されるということであり、社会認識と相関して成立する出来事であると解釈できる。「自我は、彼のまわりの生活の中に事物に関する知識が体現されていれば、それだけ精神を獲得するのであって、自我は、自分ひとりで知識を新たに構築している個々独立の精神ではない」[4)]と述べている。したがって社会認識的な教養とは、逆に個々が意味獲得する行為を社会的な文脈において展開することに相関して成立するとも言える。そしてデューイは、この展開には想像力の駆動を不可欠としている。「教養とは、想像力が、屈伸性において、範囲において、感入の度合いにおいて成長して、ついに個々人のいとなむ生活が自然の生活と社会の生活によって浸透されるにいたるような、そのような想像力の成長をいうのである」[5)]と述べており、教養は、自己の内なる想像力の働きとして把握されるのだが、それは社会的経験という学びの伸長に見出されるという謂いである。今を生きる教養は、若者の自己理解と社会認識の形成と関連して考察する妥当性が示されている。

工学教育における教養について例えば「工学における教育プログラムに関する検討委員会」（８大学の組織：北海道大学，東北大学，東京大学，東京工業大学，　名古屋大学，京都大学，大阪大学，九州大学）では、「工学は人間生活を豊かに、また快適

にする技術の基礎となる学問であり、社会に密接に関連している。社会構造と社会意識の変化に伴い、研究教育をつかさどる大学も変革を求められるのは当然であり、・・・『知の再構築』を真剣に考えるべき時期に来ていると言える」という認識を示している。そのうえで、「教養教育」の在り方についても言及している。将来、工業製品の設計や製造、研究開発に携わる工学技術者が、専門知識のみに偏らず幅広い視野と総合的な判断力を養い、バランスのとれた人格形成を行う上で、教養教育が重要な役割を果たし得ると述べている[6]。

この教養教育の観点には、工学教育が「自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることができる」という力に負うところ大であるという認識が含まれている。教養教育が専門教育と対置されるというより、両者の有機的な連関に工学教育の可能性を探ろうとしているといえよう。その真意は、社会生活を送る上で身に付けておくべき基本的知識と技能を習得したり、現代社会が直面する諸問題について多面的な理解と総合的な洞察力を深め総合的に判断することを促すことであったり、また、学際的に取り組む姿勢の涵養であると言える。

この観点は、我々の本研究からすれば、大学生の自己理解と社会認識の関係について考察していくことであると言える。社会の変化が若者たちの自己理解－社会認識を変容させている今日において、工学教育を支える背面を探るということである。我々は、「現代社会と人」という科目において、この要請に直接的に応えていくことを目指している。

本学工学部人間科学科目「現代社会と人」（A：前期開講　B：後期開講）は、今日的な社会問題を講義し、それを受けて受講生に作文を課すオムニバス形式の授業である。学生達が、この今日的な社会問題に対して他人事としてではなく当事者意識をもって対面し、問題の所在の認識と問題解決を我が事として考えることを目的としている。大学教育における当該科目の教養教育的意義を当事者意識の形成として原理的には位置づけられるのではないか。それにより、この科目の受講を通して学生が自己理解と社会認識を深めることの意義を根拠づけることが可能ではないか。

3　自我論－自己理解と社会認識

近年、ボランティア活動が様々な形態において様々な場所で行われている。阪神大震災以降、若者たちもこの活動に参加している。そしてこの活動には、つい付きまといがちが悲壮感とか正義感という切迫した感じはあまりない。むしろ、自然に繋がっているという感じである。この活動を通して、自分と社会について感じ、考えようとしている。活動を通してこの二つのつながり方とつながり具合の理解を深める参考にしている。この状況は、現在の特質を反映していると言える。「～べきだ」という意識に規定されているのではなく、対世界への参加を内発的な動機で試みていると言えよう。ボランティア参加者数は多くはないが、現在の特徴を一定現していて興味深い。

かつては、経済成長や社会改革が多くの人々の社会理念や社会意識を規定していたし、共有しているという同質感があった。「共通の問題」として意識する形で世界理解をしていた。しかし、最近は様々な条件が向上して、生活における自由度が増してきた。それに伴い規範の緩やかな状況が出現している。この状況では、様々な社会問題が、いわば「～べきだ」論として個人の優位に置かれて要請するものではなく、個人性と社会性の同レベル位相をつくり出している。

この状況はしかし、自我問題をも新しい形で生み出している。ボランティア活動に参加するとか、社会的活動に関われる人以外は、自分の行方を漠然と模索している。謂わば自分を掴むための糸口が見つけにくい状況である。「自我というのは、自分の生き方というか、自分のなかで、これが大事なこと、よいこと、すべきこと、という基準がはっきりしたときに確定する。だけどそこに大きな軸がないために、みながバラバラの形で悩んでいる・・・」[7]という状況になっている。自我をどう持つかというやっかいな課題といえる。かつては自分の役割において自己像や社会像が徐々に形成されていたわけだが、今日では多様な自由の条件獲得が同時にこの役割意識を希薄にしていったといえよう。

ところでヘーゲルは、『精神現象学』において自己と社会（他者）との関係について、三つの範型を示した。大学生の自己理解－社会認識の関係を、この範型を補助線とすることにより掴み易いものにしてくれる。三つの範型とは、ストア主義・懐疑主

義・不幸の意識である。

ストア主義とは、「ほんとうは人間というのは他人からの承認を必要としているんだけど、自分が自分のなかだけで理想をつくって閉じこもっていて、他人が何と言おうと関係ない、という態度をとる」[7]。欲望は相対的なものなのに他の人は必死で自我を押し出そうとしている、と認識しその認識に於いて自分の優位を保とうとする。懐疑主義とは、「相手の言うことに何でもいちゃもんをつける。・・・Aと誰かが言えば、それと正反対の理屈をまことしやかに言ってみせる」[7] 態度において、自分の優位性を保とうとする。懐疑主義は「観点の変更でどんな理論も相対化できるという知によって」[7] 優位性を保とうとするのである。不幸の意識とは、すでに存在している強力な物語（宗教、主義）に依拠して、その物語を体現する人間になろうとする態度である。「いろいろ思い悩んで、絶対的なものを立ててそれをつかもうとすればするほど、自分と絶対的なものとの乖離に気づいていて分裂せざるを得ない」不幸の意識は、こういう分裂のなかで自我理想の形成を行っている[7]。（これらについては、8）ヘーゲル著『精神現象学』の（B）自己意識　B　自己意識の自由、ストア主義とスケプシス主義と不幸な意識、参照）これらの範型から青年期特有の自己中心性とアイデンティティ形成の過程が理解される。

先にも述べたように個人的な快適で、そして便利で、美的な生活を実現することが軸になった今日の状況においては、社会的な有意義存在を自我理想のモデルにしていた状況とは異なっている。この状況は、一部の社会的優位性を獲得した若者にはあまり多くの不安をもたらさないだろうが、多数の若者は社会像の保持が難しいために多くの不安を抱くことになる。

竹田と西は、しかし、このような状況において次のように自我問題（自己理解－社会認識）を捉えることを提案している。すなわち、自我の問題が大事で、社会の問題が大事ではないということではない、というのだ。そうではなくて「自我の問題は、社会の問題との関係の像と必ず支えあうような原理を持っている。それをはっきりさせることが大事だ・・・」[7] と。そしてそれは、自我や主体や主観の上位に『社会』や『他者』を優先させて、倫理を要請するような考え方とはぜんぜん違うともいう。だから今日の状況として社会的な問題や社会性にリアリティーを感じなくなっているのは、矛盾の原因が一元的ではなくなり、また変革の客観的条件が小さくなったからであるという認識に立つことがポイントになる。したがって「人間が軟弱になって、あるいは倫理的に堕落したので社会的関心が持てないというのではない」[7] と言っている。

自我の展開におけるストア主義と懐疑主義との右往や不幸の意識へと左往していく人間が、社会との関係の像を見失って停滞していたら苦しくなるばかりである。すると問題は、どういう形で問題を提出したら人々の「繋がりの感覚」を掴み直せるか、ということになる。教育にもこの問題提示の仕方が問われている。

我々が行ったアンケート調査の結果からもこの指摘を証左するものがいくつか明らかになった。（詳細は、本紀要「大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（2）（3）」参照）すなわち、明確に自分のやりたいことを掴むのは、現代社会ではなかなか難しい。そして「ほんとうの自分」を設定すると、ますますあせりを感じてしまう。これは、自分のことをまず明確にするまでは、他者性を積極的には取り込まないということであろう。他人とのもめごとや混乱は回避したいということであろう。それでも、社会との繋がりを希求しているのである。また、自分の打ち込めるものを模索しているが、なかなかそれが定まらずにいる。その不安定のなかでは、他人との比較や自分への評価が気になっていることも明らかになった。また社会との関係、意味ある繋がりに関しては、彼らはそれを希求している。そしてそれを支える身近な信頼できる人はいると感じてはいるのだ。

自分の生き方に自信をもっている者は、肯定的に周囲を受容し、また肯定的に自分を受け入れている。自信をもっているので、他者の評価にあまり左右されていないといえよう。自分を価値のある人間だと思っている人は、安定した精神を保持しており、自信も持っている。そして人生を長期的に見つめていると言えよう。

ニヒリズム的な感じ方をしている者は、孤立的な状態にある。それも、まったく隔絶しているというのではなく、信頼への希求と他者の評価を希求していることが窺われる。強い欠損感をもちながらも、

どのように「とりつく島」を探していくかが見つからずに、己れのプライドをめぐって御しかねていると言えよう。いずれにしろ、自信を他者との関係で定位したいとは思っている。また期待に応えたいという開かれも内在化している。しかし、自信を持てないことが他者の評価を過剰に気にしていることに繋がっていると解することができる。まことに自我の葛藤に揺れている様子が窺われる。ニヒリズムを抱いている現代の若者の特性は、自我の範型における懐疑主義と関係をもっている。自分の優位性の感覚を獲得したいと願いつつ、全てを相対化することに停滞してしまう。

さらにはまた、不幸の意識にある者は、現況が自分への愛に過ぎないことに気づいていくことにより、より強靭な思考を展開できる可能性もある。あらゆる超越項からの物語に依拠しないで、自分の意識と周辺世界との相関関係を自覚していくときに、新しい理解への開かれが出現する可能性をもっている。

いずれにしろ、これらの新しい理解へのきっかけという手段・方法は容易にパターン化しえないぶんその設定が難しいが、自分の欲望の形を「そのもの」として理解したら、新しい自己理解－社会理解を再構成し得るといえよう。

自我葛藤のうちに自分の欲望の形を「そのもの」として理解したら、新しい自分の「可能性」という自由の感触を獲得したことになる。自分なりの納得において社会的な文脈で欲望実現の方向性を感触したと言えよう。

4　自由と当事者意識

デューイは近代以降の人々について、「より大きな活動の範囲と、したがって活動に当然含まれる観察や着想のより大きな自由を欲した」[4]と、述べている。近代以降の認識の特性や精神のはたらきについて、彼は独自な捉え方をしている。すなわち自然や他者と相互に関係しながら、世界とのいっそう密接な関係をもとめ、そして世界についての自分たちの信念（belief）を直接に形成するところに自由を感じていたと捉えている。知識を獲得したり、信念を検証するという営みを個人の権利や責任として了解してきた、ということである。そこでは、超越項に規定された自己理解を相対化する。そしてこの個人の知的成熟、すなわち意味の獲得に関して、社会的環境においてその相互交流以外にはその契機はないとする。「いろいろな信念を体現しているいろいろな活動に参加すること（社会的な交わり）を通して、彼は次第に自分自身の精神を獲得して行くのである」[4]、と。したがって、「新たな観念、すなわち事物についての、一般に認められている信念によって権威づけられた考えとは異なるあらゆる考えは、その起源を個人の中にもっていなければならない。新しい考えは、・・・つねに芽を出しているが、慣習によって支配されている社会はそれらの発達を促進しない」[4]のである。近代は、このような新たな信念形成と権利や責任とを不離の関係として生み出した。そしてこれ以降は、探究と発明の絶えざる更新において自己理解および世界信念・世界理解を更新した。この精神のはたらきは近代以降、不可逆な推移としてデューイには捉えられていた。

ところで竹田青嗣は、ヘーゲルの『精神現象学』における「自己意識論」を用いつつこの自由の感覚の獲得について以下のように論じている。「純粋な能動的内省能力としての意識」（普遍性）が一方にあり、そしてもう一方には「規定されたものとしての自己意識」（特殊性）という契機があり、「自由な意志」（個別性）はこの両契機の統一である、というヘーゲルの言い方の真意は、「『自由』はわれわれの経験の意識から現れた感覚であり概念である。」ということであるという[9]。そして、それを根拠づけるものについて竹田は、次のように説明している。たとえば子どもが親から様々な規定（命令・禁止・ルール）を受けて、この規定力で拘束された存在と感じる。しかし、この関係全体を思惟し表象して、自分が規定されていることの関係と意味を理解する。「一方で規定された自己の関係をつかみながら、もう一方でそのような関係として世界をつかみ直す『自己意識の世界』を獲得する。この自己の世界表象の能力が、人間にはじめての『自由』の感覚を教える」[9]と述べている。

このように自由の感覚の獲得については、所与の場所に自ら関与していくことを無視できない。場所から回避するのではなくそこに棲みつくことが関係把握にとって大切である。この場所において自分が規定された関係と意味を掴まなければならない。デューイもまたこのような自由の在り方について次のように把握していた。「自由を求める要求の本

質は、個人が集団の利益に彼独自の貢献をなすことができるようにし、また、社会的指導（social guidance）を、彼の行動への単なる命令的指図ではなく、彼自身の精神的態度の問題とするようなやり方で、集団の活動に参加することができるようにするような情況が必要だという点である。・・・規律および自由の各概念が行動に表出される精神の質を意味することに気づくならば、それらの間にあると思われている対立は消失するのである。自由とは、本質的には、学習において、思考ーそれは本人自身のものであるーが果たす役割である。すなわち、それは、知的自発性、観察における自主性、明敏な創造力、結果を予見する力、それらの結果に適応する器用さを意味するのである」 [4)]、と。このデューイの考え方を参照するならば、自由は、社会的指導の加圧がないということでもなければ、物理的拘束からの解放という次元でその本質をみるのでもなく、個人と他者との関係性において了解できる。とりわけ教育においては協働性において見出している。即ち、どこまでも個人の知的探究に個人的統制（自己統御）と社会的統制が相互に関係するということである。

他人の精神活動との関係において自己活動の展開の方法を習得していく過程は、精神作用の社会性や公共性に特色づけられている。可能性の観取と自由の実現は、この社会性や公共性という独自な関係性に規定されているのである。デューイは、この関係性を考慮しないときに、狭隘な道徳的個人主義が提唱されてしまうと批判している[4)]。そこでは、「～べきだ」を唱導して自足してしまうことになる。

ここには、一つの関心を共有する人々の数がますます広い範囲に拡大していく過程にどこまでも注視していく必要性が示されている。人々が或る一つの関心を共有すれば、各人は自分自身の行動を他の人々の行動に関係づけて考えなければならないし、また自分自身の行動に目標や方向を与えるために他人の行動を熟考しなければならないという関係性が明らかになる。我々は、このような自己理解と社会理解の相関的深化は、ズレという不同性から共有という同一性へと変貌していく認識過程と見ることができる。

生活のどの場面でもこの同一性を保持するということは確かに難しい。相互の関与を避けている場合には、この保持はとりわけ難しい。いかなる世代にも言えることである。そして、当事者とは、それでも尚この相互の関与の調整を行おうとする者であると考えられる。諸条件を抱えた人間が、この共同性を産出する働きかけをすることが当事者と言えよう。他人への要求もまた、この意識においてその根拠を持っている。

これを教育の問題として改めて捉え直せば、共同社会では、いろいろな関心が相互に浸透しあっており、進歩・再適応が重要な問題になるので、そういう社会生活が実現されるように、計画的で組織的な教育にいっそう深い関心を向けることが要点となる。先にみたように自由とは、共有化されている意味や価値という媒質の中で思考し行為することを通じて可能性を獲得することであった。すなわち社会的交わりのへの配慮に応分して自分の精神を獲得していく過程と言える。そうだとすれば、流動的で多様に変化する社会では、その成員を教育して、それぞれに自分自身の独創力や順応性をもたせるように教育的配慮を行うことが大切になる。変化の意味や諸関連を理解するように経験を創造しないと、変化に圧倒されるだけで自閉していく。そして、豊かな意味の産出を断念していくことになるだろう。

5　大学における教養教育の在り方ー当事者意識の形成ー

（1）このような考察の観点に立った時、改めて「現代社会と人」という当該科目の在り方が示唆される。学生達は、アンケートから明らかになったように、自我をめぐっては不安をいだき孤立の感覚をもっている。しかしまた、身近な人間に繋がっているという感覚はもちろんのこと、この時代の不特定多数の人々とも深いところで繋がっているという開かれた感覚をもつことが要点となってくるが、それへの欲望も潜在させているのだ。そこでは、「社会に関わるべきだ」ではなく、深いところで繋がっていく感覚の形成が大切になる。竹田は、「人間が社会的存在だというのは、人間のエロス（生き生き感・ありあり感：筆者附）が関係的原理を持つということであって、自分より他人や社会が大事というのとは全然違います」[7)] と言う。これは、自分の感受性や価値観が他人との関係において試せる関係

を持つように開かれていくことが大切であるという考え方である。謂わば自分を生かす場所から社会性を掴む可能性を探っていくということである。

この場所は、考えてみればあらゆる生活場面において出現し得る可能性がある。近年のボランティア活動も、このような文脈において受け止めることができる。ごく自然に繋がっているという感触は、社会への繋がり具合をリアルに感触できる場所と考えられる。そして、大学の授業は、そのきっかけを与える場所として位置づけられる可能性をもつと考えられる。

スローンは、概念的思考は青年期に十全な発達をとげるという。そしてこの自らがもつこの新たな概念的な能力に気づいた若者は、「問いかけ応答を求めて、事物や世界や自己についての真実を知ろうと切望する」と、述べている。「自分はいったい誰なのか」「自分は実際には世界や他の人間存在とどのような関わりをもつのか」という問いかけであり、その理解への切望である。スローンは、教育上これらに応答する友人や大人がサポートしていくことが必要であるという。「想像的な洞察」とは、全人的なはたらきであり、この洞察に他者の適切なるサポートは不可欠であるという指摘である。この洞察を「参加的な知の作用」とも言っている。抽象的・概念的な知り方は、世界－内－存在である学習者の世界への直接的な関与の在り方と相関しているという見方の提案である[10)]。

（2）ところで教育の観点から平塚眞樹は、若者たちの〈社会性〉あるいは「人間力」の不足と見られがちな今日の状況を、若者自身へ問題を還元するのではなくこの現実はかれらに急速に広がる〈社会なき社会〉のもとで育たざるを得なかったことの自然な投影である、と指摘している[11)]。〈社会なき社会〉とは、マクロのレベルでいえば０ＪＴ（職場内訓練）の希薄化と企業社会再編による雇用の変化、新自由主義による行政改革がもたらした制度化された相互扶助の解体、高度消費社会化による生産者との具体的コミュニケーションを欠いた単なる購買者への変転という生活世界の社会化解体であるとし、ミクロのレベルでは、個々人にとって「関係ある」とか「無縁ではない」と感じられる範域が狭まり、そして「閉ざされた自己責任」意識の強まりとして指摘している。他者の助けや社会から援助を求めるのは甘えだ、という感覚が浸透してきているという。「自己の認識レベルでも、なお実際にはあるはずの相互連関・相互依存関係まで見失い、自己と他者をともに孤立視することで、内面における社会をも解体し始めているのではないだろうか」[11)]としている。

〈社会なき社会〉において、近代の先進国の共通するこうした社会構造の変容を不可逆としながらも、新しい時代のきりひらきの模索をしていく必要を主張している。同時にまた、若者の当事者としての「主体形成」のシステムを考えていく必要性も主張している。この工夫により自己・他者・社会への信頼の感覚を育てることが必要であるという。

具体的には、①社会的格差のなかで様々な形態の人的ネットワークの構築　②「正統的周辺参加」をして当事者の意識を形成する学習と経験の保障③知そのもののシステム性・相互連関性が発見され、豊富化されていく学習や経験の場の保障－具体的には、学校内外での共同的な場であり、総合的な学習も含めた学習の共同化と関連性の重視をする、の三つを提案している。

この提案を参照するならば本講義は、現代社会のアポリアの諸相を課題点と問題点として提示しながら今日に生きていく上での当事者意識を持たせることに一定の成果があったと言えよう。この講義において、現代社会が保持している様々なルールの在り方やこのルールの意義を改めて自分なりに感じ取っている。（詳細は、本紀要「大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（2）（3）」参照）こういう育ちの評価を行っていくことを大学も含めて社会全体で支えていくことが、遠回りのようだが結果としては意味のある己の人生・進路選択をめぐる社会の承認と採用に帰結することだろう。

したがって平塚の指摘するマクロのレベルでの課題とミクロのレベルでの課題を識別しつつ、この時代の上記の傾向を帯びた学生達の多面的な実相を明らかにして、大学独自の教養教育の可能性を探らねばならない。それは例えば、自分に自信があるかないかということが社会に対してより開かれた意欲をもって関与しようとしていることに相関しているし、他者への不信や嫌悪感は頑なであればあるほど狭い視圏で充足してしまうという学生理解の観点をもつことである。

人間はだれでもロマンを持ち生きていくが、リア

ルな生活世界は必ずしもこのロマンと直結していない。この繋がり具合の理解があいまいであれば、思考は停滞する、空回りする。この空回りはとりわけ青年期に特有かもしれない。さらにはまた、学生達に侵入してくる社会批判の思想が、「～べきだ」の道学主義的なメッセージだけならば、「アッ　そう」で収束してしまうだけだろう。きちんと自分と社会の関係を自分なりにていねいに考えるところからしか、生きた社会批判は生まれない。したがって一元化された説明体系の押しつけは、拒絶するだけだろう。

社会は様々な網の目のルールから構成されている。ルールは科学的・道徳的・慣習的・言語的という多次元の特性をもつ。そして、このルールに従い、更には改変し、更新し続ける。この自己と社会の関係性の本質を理解しその方法（スキル）を習得していけば、それは生きる自信につながり、自分の関与する領分を見つけることができる。当事者として何らかの更新という関与が可能となる。そこに「人間の自由」が存在するのである。

デューイもまた、個人主義的な学習方法（individualistic method）と社会的行動（social action）とを対立するものと考え、また自由（freedom）と社会統制（social control）が相反するものと考えると、学校制度も端的にそれを現す特質をもってしまうとしている[4)]。即ち、社会的要素が欠如すると、教材を個人的な意識に移し入れる心理主義的な過程と化していくという。したがって、個人的統制（自己統御）と社会的統制が相関する一段質の高い経験が生み出されることが必要となる。

（３）「高等教育の一層の改善について」という文部科学省の「答申」においては、高等教育を取り巻く状況の変化に関して、次のように述べている。

「少子高齢化傾向の拡大，冷戦構造の崩壊，キャッチアップ経済の終焉，大競争時代の到来，生産年齢人口の減少など，我が国の社会・経済は大きな転換期を迎えている。さらに，情報通信技術の革新や自由貿易体制の拡大に伴い，経済活動をはじめあらゆる側面でグローバリゼーションが急速に進んでいる。このような社会・経済の急激な変化の中で，高等教育機関には，単に専門分野における高度の知識・技術を習得しているだけではなく，主体的に変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力や豊かな創造性を持つ人材の養成が求められている」[12)]、と。多様な社会的変化の中で，これらに対応していくための高度の知識・技能を身に付けることが，すべての学生に求められるようになっているのだが、この「主体的に」という在り方は、これまでの考察から明らかなように自己理解－社会認識という観点が必要である。

さらにはまた、「新しい時代における教養教育の在り方について」の「審議のまとめ」と「答申」では、次のような教養教育の必要性を指摘している。

つまり、社会が物質的に豊かになる過程で価値観の多様化，相対化という状況が生まれ，一人一人が多様な生き方をするようになった一方で，社会的な一体感が弱まっており，バブル崩壊後の経済的な停滞や国際化・情報化の進行による急速な社会・経済環境の変化の中で，社会共通の目的や目標が失われている状況がある。これは我が国に限らず先進諸国に共通した課題であるとも言えるが，我が国では，物質的な豊かさの実現という戦後一貫して国民の多くが追い求めてきた目標が達成された今，次に目指すべきは「心の豊かさ」や「国際社会への貢献」であるといった漠然とした共通の認識はあるものの，その具体的な姿やそのための道筋は，いまだ明確になっていない。また，少子・高齢化，都市化の進展や就業構造の変化等の中で，長い間人々の心のよりどころであった家族や地域共同体，会社の在り方及びこれらと個人との関係が大きく変わりつつある、[13)][14)]と。　直接体験の一次性が曖昧になり，人間関係の希薄化も進んでいる状況を踏まえた教養教育の模索の要請である。

社会構造と社会機能についての知識を蓄積型で理解する学習と、思考のきっかけを得て当事者としての参加的に探究する学習を二元的に対立して捉えることもできよう。教育としてその是非を論ずることも意味はある。しかし、一番たいせつなことは社会構造や社会機能に関する概念化が、社会事象（含、他者）と自分なりの判断や選択と相関することであり、「つながり」の感触はこういう相関性に呼応しているということである。学習における「合点がいく」とか「納得した」という意味の獲得は、こうしたつながりの拡大に負うている。ここに、今日における規範形成が期待できる。

我々は、このような観点から教養教育の在り方を

模索している。本学学生に対して、その実態をふまえながらも、いわば関係を模索する「とりつく島」という手がかりをつかむように授業づくりを工夫する配慮をしなければならない。

今回のアンケートでは、「あなた自身の受講後の認識・態度変化について」も訊ねている。オムニバス形式の本講義では、９つのテーマでそれぞれの教員が講義を行っている。現代社会に関わる課題を意識した講義である。「変わった」「どちらかといえば変わった」を含めると、４割から５割の割合で変わったと評価している。今後の可能性を示唆している。そして、先に述べたスローンの言う参加的な知の作用を念頭においてその解釈を意識的に行っていくことが求められている。

６　終わりに

これまでの考察を大学教育の成果と就職との関係から問い直せば、自己理解と社会認識の深化は、自分のキャリアを展望することと不可分であるということである。

新聞の投稿欄に或る大学の学生が「企業は学業も評価して」[15]と、訴えていた。即戦力を要請していて在学中の勉強の成果をあまり配慮していないことの不満が訴えられていた。それに対して、研究室で技術補佐員を努める人がこの学生の訴えを支持している[16]。修士課程を終える頃の学生は、研究を進める上で必要な問題解決能力が養われ、論理的に文章を書く力が付いたと実感されるという。仕事を進める上でのこの基礎力を、企業はもっと評価して欲しいという訴えである。修士課程の学生と学部の学生では、修得内容も異なっているが、学部学生の評価に対しても同様の観点から学生の育ちを見て欲しい、と。それは、多くの人々に共有され得るという普遍性の根拠をもっている基礎力への評価の要求である。この育ちの過程では、先に検討したように様々な自我葛藤を経てコミュニケーション能力とプレゼンテーションの力をつけ、他者と関わり合う力も高めているといえよう。

大学生にとって、大学で学ぶことは今後の人生の大きな進路を決定する就職ということと直結している。顕在的、潜在的に、つねに就職のことが念頭にある。進路を射程距離において自己理解－社会認識の深化と拡大に繋がる一助として、本講義も位置づけることが要請されている。

参考文献

1) 速水由紀子『「つながり」という危ない快楽－格差のドアが閉じていく－』、筑摩書房、2006
2) 柳田邦男『壊れる日本人－ケータイ・ネット依存症への告別－』、新潮社、2005
3) 村上龍・伊藤穣一『「個」を見つめるダイアローグ』、ダイアモンド社、2006
4) Ｊ．デューイ『民主主義と教育』上・下、松野安男訳、岩波文庫、1989（J.DEWEY “Democracy and Education”, Macmillan Company,1996）
5) Ｊ．デューイ『学校と社会』、宮原誠一訳、岩波文庫、1992（ J.DEWEY “The School and Society”,The University of Chicago Press,1971）
6) 平成 8～10 年度の 3 年間における「工学における教育プログラムに関する検討委員会」での研究成果（http://www.eng.titech.ac.jp/~jeep/08-10.html）
7) 竹田青嗣・西研「哲学の味わい方」、現代書房、1999
8) ヘーゲル「精神現象学」、金子武蔵訳、岩波書店、1976
9) 竹田青嗣『人間的自由の条件』、「群像」8 月号、講談社、2004、
10) D.M.スローン「知の扉を開く」、市村尚久監訳、玉川大学出版部、2002
11) 平塚眞樹「次代をひらくシティズンの形成－信頼再生プロセスの参加保障」（第 5 章）『ニート・フリーターと学力』明石書店、2005
12) 「高等教育の一層の改善について」（大学審議会答申　平成 9 年 12 月 18 日）
13) 「新しい時代における教養教育の在り方について」（中央教育審議会　審議のまとめ平成 12 年 12 月）
14) 「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会　平成 14 年 2 月 21 日）
15) 朝日新聞朝刊　2006.7.29
16) 朝日新聞朝刊　2006.8.27